

ある卒業生の憂鬱

あるいは筑波大学は空気のように

村井正

宇宙開発事業団宇宙医学研究開発室

1985年 筑波大学医学専門学群卒業

筑波大学がなかったら

考えてみれば恐ろしいことである。もしも筑波大学が存在しなければ現在の生活はどのようなものになっているのか、それを想像してみるのだが、明確なイメージを持つことができない。これが何故恐ろしいかというと、それだけ筑波大学が私の人生の一部となっており、良くも悪くも筑波大学の影響を強く受けているということもあるが、最近の筑波大学のありように憂鬱な感覚を覚えているということもある。

1985年に医学専門学群を卒業し、附属病院で研修医生活を送り、その後南極観測越冬隊に参加したため一時期つくばを離れたが、帰国後大学院博士課程医学研究科に4年間在籍し、いろいろと紆余曲折はあったものの、現在はつくば市内の某独立行政法人に勤務している。気がついてみれば、やはり筑波大学を卒業した家内と大学院時代に結婚し、その家内も現在は筑波大学の教

官である。つくば市内での引越しは、追越学生宿舎から始まり米国生活を挟んで6回を数えるが、現在はつくば市内に自宅を建て、筑波大学の横をかすめながら通勤する毎日である。自宅に帰れば、「速報つくば」だの「筑波フォーラム」だのが当たり前のようにマガジンラックにはいつている、というのが私の生活である。私の卒業した医学の分野は、卒業後も大学との繋がりが長く続く傾向があるのであろうが、それにしても東京駅からの高速バスやら西武百貨店の特売場やらで、同級生はもちろん先輩、後輩、さらには恩師の教授にまで挨拶することがしょっちゅうなのは、卒業後20年近く経ったことを考えれば、やはり妙な状況ではあろう。

卒業生全体を考えれば、未だに学生時代のモトリアムと連続した環境で生息している私のような境遇は、特殊であると自覚はしている。特殊であるからやむを得ない

のではあるが、今回「開学 30 周年記念筑波フォーラム特別号」の原稿依頼を受け、執筆要領を見て強烈な違和感を覚えた。卒業生の立場で原稿を書くのであるが、「思い出や注文」「本学で学んだことの回顧談」「筑波での思い出に残る教育、授業」等々について書きなさい、というのが編集側の希望であるらしい。編集上の都合でやむを得ないこととは思いつつも、卒業生は筑波大学を「回顧」し「思い出」を語る存在であると決めつけられていることに、違和感を覚えたのである。筑波大学を通過し離れてしまった卒業生は、大学にとっては過去の存在である、と言われたような気分である。

違和感と憂鬱

まあ一種のわがままのような違和感ではあるが、私の現在の筑波大学に対する憂鬱な感覚とこの違和感とがどこかで繋がっている、ということに気がついた。違和感の理由は、私の境遇の特殊性にあることは明らかであり、私以外の多くの卒業生にとっては筑波大学が通過地点のひとつであったのは事実であろう。一方で「筑波フォーラム」の原稿依頼が筑波大学全体の意識を表しているとも思わないが、筑波大学を構成する意識の中に、卒業生を外部的存在とみなし、その暗黙の対立概念として「大学の内部」という意識があるような気がするの

である。廻りくどい書き方になってしまったが、要するに最近の筑波大学は「内向き」である気がするのである。

最近はそれ程でもないのだろうが、私のように筑波大学開学初期の卒業生は、筑波大学が「新構想大学」であることを祝文のように聞かされた。実際今になって振り返って見ると、「新構想教」という名の新興宗教であったのではないかとさえ思える程である。「新構想」に関する当時の資料が不思議なことに自宅に保管してあり、よい機会なので読み返してみた。それにしても 30 年以上前に「新構想」の旗を掲げ、大学の変革に挑戦し現在の筑波大学を生み出した当時のエネルギーには感服させられるものがある。筑波大学が人生の一部をなすと自認する私の場合には、当時の議論と決断が潜在的に自分の人生を決定する要因であった事が実感される。このことを語り始めれば際限がないのでひとまず置くが、私の憂鬱は「新構想」を構成する重要な概念であったはずの「開かれた大学」についてである。

開かれた大学

「開かれた大学」と言うのは、「新構想教」の最重要祝文であったと言えばよいのだろうか。繰り返し聞かされて記憶の中に刷り込まれたのであった。思い返して見れば、当時「開かれた大学」が実感できたのは「堀

と門のない大学」と「公開講座」であった。堀と門の無いのは大変結構である。おかげで現在大学構内を通過して通勤することもできる。もっともそれも最近段々あやしくなってきたのは残念であるが、それにしても「開かれた大学」は堀と門を作らないことで実現できたのであろうか。

少なくとも私の知る限り、筑波大学が「開かれた大学」となるための努力を続けてきたことには疑いが無い。公開講座はバラエティーがあって地域住民の評判も良いし、社会人大学院は社会のニーズを適切に捉えていて魅力的であり、連携大学院は筑波研究学園都市の特性を活かして大学、研究機関双方にとってメリットのある試みである。リエゾンオフィスは産学連携の面で成果を挙げつつあるし、最近ではTARAと地方自治体との共同プロジェクトも軌道に乗りつつあるようである。それはその通りであるし、ここで例を挙げた以外にも筑波大学は常に「開かれた大学」を標榜して革新的かつ先導的な試みを行ってきたのである。

しかしながら誤解を承知であえてひねくれた書き方をしてみれば、公開講座は大学で行われている高度な研究を「一般向けにやさしく焼き直した」カルチャーセンターであってその道のプロの役には立たないし、社会人大学院は数居の高い競争をくぐり抜けた挙句にわざわざ大塚地区まで出向いて

高い授業料を払うのであるから気楽に参加するわけにもいかないし、連携大学院はたまたま研究学園都市にある筑波大学があまりお金を使わずに研究機関のリソースを学生教育に利用しているだけのようにも見える。リエゾンオフィスは「さあ筑波大学にはいろいろありますよ。」と言って待っているだけのお役所の窓口のようにも見えるし、地方自治体との共同プロジェクトも画期的なのは自治体の側の発想と決断であって、筑波大学はたまたまそれに乗っただけのようにも見える。

もちろんこれらの(あるいはこれ以外の)試みにおける関係者のご努力は大変なものであるのに疑いは無い。またその意義や価値について疑問を差し挟むことを意図しているわけでは毛頭ない。むしろこれらの個別の有意義な努力にも関わらず、結局のところ「筑波大学は素晴らしい、筑波大学があって良かった」とか、「筑波大学はなるほど開かれた大学である」とか、心から言われることが少ないような気がするの、私の憂鬱の種である。そして筑波大学の「内向き」の意識が、「開かれた大学」と胸を張ることをためらう原因になっているような気がしてならない。

内向きの大学

それにしても何故「内向き」だと感じて

しまうのだろうか。同級生の噂話が学内政治の話ばかりだからという訳でもない。たまたま学内を歩くと、妙によそ者として見られているように感じるの、おそらく私の被害妄想のせいだろう。仕事の打ち合わせで大学を訪れても学外者の車を駐車させる場所などほとんど無いのも、昨今の学内交通事情を考えればやむを得ないことではある。これらのある意味些細なことでも、大学を訪れる敷居が高くなってしまう原因ではあるのだが。

30年前の新構想教がいみじくも予言した通り、社会は極めて学際的である。医学出身の私ではあるが、企業経営に首を突っ込むこともあれば、法律論に巻き込まれることもある。例えば「医学的な危機管理」について考えようと思えば、医学の知識より危機管理の理論について勉強したいと思うが、出身母体の医学系を訪れたところで、なかなか知りたいことはわからない。ちょうど都合のよい公開講座でもあればよいが、そもそも公開講座だけでは物足りない。少し突っ込んで専門的な勉強もしてみたいし、そのために多少のお金を払ってもかまわないのであるが、かと言って数年かけて学位をとろうとまでは思わない。せつかく宝の山のような筑波大学の傍を毎日通っている卒業生が、結局筑波大学を訪れる理由を見つけれないままなのである。なぜならば

筑波大学は内側ばかりを見ており、周りを見回して社会の変化に対応しようとする目を閉じているからではないだろうか。社会へ開いた入口が古くなってしまったら、開かれているはずの大学は少しも開かれているようには見えないのである。

筑波大学は空気のように

冒頭に述べたように、筑波大学は私の人生の一部分をなす重要な存在である。私にとっては、決して過去の通過点ではない。私のような卒業生が、「そうだ天気が良いので筑波大学でも行ってみよう。」と思いつき、訪れてみれば深い叡智の森で遊んで知的興奮が得られる。そしてそのことはもちろん私の人生を豊かにしてくれるが、大きな目で見ればやがては人類全体の幸福に寄与する。それが私の夢想する「開かれた大学」である。そんな筑波大学は空気のように、すなわち常に存在するが意識することはなく、しかし存在しなければ生命が絶たれてしまうような、貴重だけれども自然な存在であって欲しいと、痛切に願うものである。

(むらい ただし)